

Werner Krause, Werner Sombarts
Weg vom Kathedersozialismus zum
Faschismus, Berlin 1962, 211 S.

一

ヴェルナー・ゾムバルト 1863—1941 はドイツ新歴史派経済学の最後にして最大の巨匠といわれている。彼のごく学界に多彩な業績を残し、社会思想界で波紋を投げかけた社会科学者は数多くあるまい。すでにわれわれは同時代の学界、思想界からゾムバルトに関する無数の毀誉褒貶の声をきくことができた。のみならず彼のごとき人物の思想と業績とを研究することは若い研究者にとって魅力ある仕事でもあった。彼をテーマとする学位請求論文も戦前すでに一二にすぎなかった。Arthur Nitsch, Sombarts Stellung zum Sozialismus, Leipzig 1931. M. J. Platonik, Werner Sombart and his Type of Economics, New York, 1937. などその一例である。ゾムバルト死後二十年の今日でも未だ状況は変っていない。最近また新しい学位論文が出版されたのである。しかもこれは東ドイツのフンボルト大学への学位請求論文であった。ここに批判せんとするヴェルナー・ク

ラウゼの書物がこれである。

クラウゼの労作を他のゾムバルト研究書と分つ点は凡そ下記の三点に存するであろう。

一、ゾムバルトの生涯、人格、思想、経済学、社会学の全体をあますところなく研究対象としている。

二、マルクス・レーニン主義の立場に立つてゾムバルト批判を行なっている。

三、ゾムバルトをめぐる若干のエピソードを披露している。

これら三点はクラウゼの書物の根本特徴であり、彼の労作の長所も——若しありとすれば——短所も結局はこれらの特徴から派生してきているとおもわれる。

以下この三点に焦点をしばってクラウゼの労作を検討してゆこう。

二

ゾムバルトの全人格と業績とを検討するために一書をささげるには、まづ研究対象がまさに研究に値するものであることを明かにしなければならない。ところでクラウゼのごときマルクス・レーニン主義の立場にたつものがゾムバルトの業績に否定的見解を出すことはあらかじめ想像されるところであろう。したがってゾムバルト自体の評価は予じめきまつており、われわれがまさに重要だと考えるゾムバルトの人格

と業績とを内在的に追求し、批判してゆくことはクラウゼにとつて意味がすくないものとなろう。クラウゼはまず「いまさらゾムバルトの労作を検討する必要があるであろうか（七ページ）」という疑問に自ら答えなければならない。

彼はゾムバルトの幻をつくりあげ、これに突撃をかけるドン・キホーテの役目を果そうとする。すなわち彼は戦後の西ドイツでみられる若干の出来事からゾムバルトの幻をつくりあげるのである。ゾムバルトの書物のいくつかが戦後西ドイツで再刊されたこと。Wirtschaftssystem 概念などゾムバルト学説のいくつかが今日まで研究対象とされていること。最近発行された若干の経済学史に関する書物が、ゾムバルトを歴史的経験的経済学と理論的抽象的経済学とを綜合して新しい経済学をうちたてた偉大なる社会科学者として取扱っていること。さらにゾムバルトがマルクス理解者であつたと評価され、反ナチ主義者であつたとさえ評価されていること、など。

クラウゼはこれらの出来事をもつて無難作に西ドイツに於いて今なおゾムバルトが非常に高く評価され、大きな現実的影響力を持つていることを示すものと認める。しかし筆者にはクラウゼのこの考えはかなり一方的であり、西ドイツの経済学の現況についての無知——あるいは故意なる無視——をしめす幻以外の何物でもないとおもわれる。

クラウゼはこの幻を彼のゾムバルト研究により破砕しよう

とする。そしてゾムバルトが究極に於いてブルジョア階級の利益を代表し、労働者階級への裏切を使命とし、ブルジョア経済学の没落に参劃したことを示そうとする。ここに彼は本書の第一の意義を見出そうとするのである。同時にゾムバルトの生きた時代と彼をとりまく階級状況などにも目をやることによってドイツ・ブルジョア経済学の没落史の一研究としての意義をも本書にもたせようとした。

したがってクラウゼの研究目的にとつては研究対象をゾムバルトに限定する必要は必ずしもない。マックス・ウェーバーでもシュムペーターであっても、要するに現代の偉大なるブルジョア社会科学者を対象にしさえすれば皆大同小異の議論と結論がでてくるわけなのである。

クラウゼはゾムバルトの思想と業績との発展を年代記的に紹介批判してゆく。

三

彼はマルクス・レーニン主義に拠つてゾムバルトの思想と学説とを批判する。

ゾムバルトは十九世紀末のマルクス理解者としての立場から漸次マルクス修正者、マルクス批判者、マルクス反対者というべき思想へと変遷したといわれる。しかしクラウゼの立場からすればゾムバルトの思想には本質的变化がみとめられない。すなわちゾムバルトの最初の労作であり、かつマル

クス派からもブルジョア経済学派からも評判のよかったローマ・カムバグナ(一八八八年)研究、家内工業に関する諸研究、世界的名声を博した「十九世紀に於ける社会主義および社会運動」(一八九六年初版)、「労働運動の理論と歴史」(一九〇〇年)。これら初期の労作においてマルクス主義に理解をしめしたゾムバルトと、反マルクス主義を徹底的な形でしめした「プロレタリア社会主義」(一九二四年)、「ドイツ社会主義」(一九三四年)に於けるゾムバルトとは本質的に変化はないのだとクラウゼは考える。

クラウゼによれば初期ゾムバルトが高名なるマルクス理解者として如何にプロレタリア問題に関心をもとうとも、それは所詮ブルジョア社会存続のための労働対策として意味をもつにすぎぬものであった。学問としてのマルクス主義をゾムバルトが高く評価し且つ修正主義的立場で批判したのも究極に於いてはマルクス主義を学問の範囲内でのみ認め労働運動をマルクス主義から離反させこれをブルジョア社会にとって無害のものにさせることを使命としたのだ。

ゾムバルトの頭にあるものは「社会の福祉」であり、これはとりもなおさず搾取階級の福祉であった(二二ページ)。当時ゾムバルトは社会民主党に入ることを避け、正統派社会民主党員を無頼の徒呼ばわりしていた(五二ページほか)のである。

クラウゼによればゾムバルトはその本質において当初より

労働運動に背を向ける修正主義者であり、ブルジョア社会主義者であり、講壇社会主義者であり、ブルジョアイデオロキだったのだ。

従ってクラウゼの解釈によるとゾムバルトのいわゆる思想の変節は単に時代の経過とそれともなう階級状況の変遷に応じて同一思想が異なったより公然とした表現をとるに至ったにすぎないものである。たとえばソビエト権力の誕生はゾムバルトの社会主義運動の評価に当りこれを歴史的現実的なものとして評価する態度から心情的欲求より生じたものとして評価する態度へとかえるに力があつたとクラウゼは考える。

かかる本質はゾムバルトの経済学説のうちにもしめされる。クラウゼによればゾムバルトはマルクス経済学説を形式的部分的に承認することによってその危険な部分をとり去り、これをブルジョア社会に危険のないように「豊富化」し「前進」せしめた。これがゾムバルトの主著であり新歴史学派最大の労作といわれる「近世資本主義」(初版一九〇二年、改版一九一六——二七年)を中心とするゾムバルトの資本主義研究の本領である。近世資本主義に於いてゾムバルトは主観的・心理的動機を重視する方法をとりブルジョア経済学に於ける科学性を保持しようとした(一〇八ページ)。

クラウゼはゾムバルトが資本主義の成立と生成とを資本主義企業家やその精神の歴史と考え、プロレタリアートや搾取

関係の成立を重視せぬのを非難する(八四ページ)。クラウゼの批判によれば恐慌論に於いてゾムバルトは恐慌原因を第一に貴金屬の突然の増加と結びつけて説明することによって恐慌の周期性を否定し、その偶然性をしめそうと企てた。第二にゾムバルトは有機的生産部門と無機的生産部門の不均衡的發展が恐慌の原因であるという誤まれる理論を打ちたてた。これはまさにローザ・ルクセンブルクが Goldtheorie と Elweisstheorie との混合とからかつた代物なのだ(一一八ページ)とクラウゼはいう。彼はローザの権威をそのまま借用してゾムバルトの恐慌論を批判したのである。ゾムバルトは「三つの経済学」(一九三〇年)を階級関係から導き出さ

なかった。規制的经济学と整序的経済学に対立する理解的経済学があるのではない。ゾムバルトのごとく個人認識の究極的根底などから三つの経済学に分類すべきではない。階級関係より経済学を分つべきである(一四四—五ページ)。そうするとここに真の唯一の学問たる唯物弁証法的経済学と俗流経済学との対立がみられるにいたるのである。ブルジョア経済学はすべて根本的には同一の階級的立場にあり資本主義の護持という同一目的を追求するものであるから方法論争などは全く無意味である(一〇五ページ)。

クラウゼはゾムバルトの思想と業績とを評価するに当り、これらをすべて時々の階級対立の状況に還元し、そこからゾムバルトの反動的役割を導き出そうと企てる。そしてこの役

割があたかもゾムバルトの究極の意図から出たものであるかのごとく説明する。そしてこの究極の役割ないし意図を一挙にブルジョアイデオロクという結論にまでもつてゆくのである。かくてゾムバルトの各労作はこの究極意図の時々の階級状況によって異った表現とのみみなされることになる。一体あらゆる思想、業績を究極の立場から一挙に——現象の多様さを媒介せずに——評価することが、人の業績と思想を理解する道であろうか。歴史的個性認識もなく、すなわち個人の内面的努力の推移として跡づけることなく、究極の立場のみを強調する一色に塗りつぶされた評価にあつては対象が異っても同一の判定がいつも下されることにならざるをえぬ。

それでは一体ゾムバルトはマックス・ウェーバーであり、シユムペーターなのであろうか。

クラウゼのゾムバルト批判がわれわれの読まない以前に見当のつく程のものであることはすでに充分了解できたとおもふ。

しかもゾムバルトがブルジョアイデオロクであり、マルクシズムスへの裏切者であるから、ゾムバルトの評価を引ずり下ろすためにあらゆる些細なことがらまでクラウゼは持ちだす。例を若干あげよう。ゾムバルトは「レーニンの天才的業績（帝国主義論）」を『貧弱な学問的に非常に価値の低い労作』と評価している（二三七ページ）。

ゾムバルトは厚顔にも「高度資本主義」（一九二七年）など

でマルクスの後継者であるというような言辭を弄する。ゾムバルトのマルクシズムス批判、ボルシェビズム批判、社会科学をブルジョア社会の奢侈と考える学問観などには後のソビエトの偉大なる輝かしい発展の現実からみて誤まりがあつた（一五一——五二ページほか）。

マルクス、エンゲルスをはじめとするその他の正統派マルクシスト達も多かれ少なかれソビエトの輝かしい発展を正確に予言できなかったが故に当然最後の例と同様な批判が彼等にもなされて然るべきである。この点ではクラウゼの批判は天につばするにもひとしいものといえよう。

四

以上クラウゼのゾムバルト批判が多くの点で疑問の余地あるものであることが明かになった。それでは一体クラウゼのゾムバルト研究は無価値であらうか。筆者はこの問に対して全然無価値であるとはいえないと答えたい。

本書はまずその構成上で長所をもつ。すなわち本書はゾムバルトを全体的に取扱つた数少くない書物の一つである点において学問的意義がある。また本書はゾムバルトの著作論文、主としてドイツで発行されたゾムバルト批判の文献を相当程度網羅した附録をふくむ点に於いても有用であらう。とくにマルクシスト側からのゾムバルト批判のくわしい文献表がよい。

内容上の長所とおもわれるものは、主として先にあげた本書の第三の特徴に関連する。すなわち本書に収録されたゾムバルトをめぐるエピソードが筆者の興味をひくのである。例をしめそう。

第一はゾムバルト宛エンゲルスの手紙の全文が本書に収録されていることである（本書補遺）。この手紙は青年ゾムバルトが一八九四年「カール・マルクス経済学体系批判のため」を Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik に掲載したのを契機として書かれたものである。こゝにはゾムバルトの資本論第三巻批判（第一巻との関連からする）についてのエンゲルスの好意ある感想が読みとられる。これは初期ゾムバルトを理解するうえにも、また当時のブルジョア経済学に於けるマルクシズムの受容の水準とこの方面に於けるゾムバルトの役割などについても光をあてるものである。

第二は彼のベルリン大学教授就任をめぐる公式記録からのエピソードである。アドルフ・ワグナー Adolph Wagner の後任教授推薦委員会に於いて マイネッケ Meinecke やデルブリュック Hans Delbrück がゾムバルトの就任に反対の発言をなしたのである。彼等はゾムバルトが学問的真摯さを欠くと考え、また彼の性格の純潔さにも疑問をさしはさんでいる。（一三五ページ）これによってわれわれはゾムバルトの人格、学問研究の態度を当時の学界がどう評価していたかの一端を知るとともに、これを通してゾムバル

ト自身の一面を間接的に明かにすることができる。また当時の学界に於ける教授就任のあり方の一半も推察されて興味ふかい。

第三には戦後の東独フンボルト大学に於けるゾムバルトの（死後の）粛清決議が興味をひく。この大学はかつてゾムバルトが教鞭をとったゆかりの地であった。一九四九年メレロヴィッツ Konrad Mellerowicz が経営学の講義中「ゾムバルトを温かい心で読みなさい」と呼びかけたことがあった。これが FDP や SED (Freie Deutsche Jugend や Sozialistische Einheitspartei Deutschlands) の学生間で問題になり、集会を開くにいった。そしてつぎのような決議がおこなわれたのである。すなわち、ゾムバルトはショロビニストであり、マルクスシズムとソ同盟の不倶戴天の敵であり、誹謗者である。ナチと指導者原理の弁護者であり、学問上のベテン師である。ゾムバルトの名は今日ドイツインテリの反動の伝統への警鐘に役立つものとして胸に銘記しておくべきである（一七四—七五ページ）。

このエピソードはもはやゾムバルト研究という観点からは意味が少なく、ゾムバルト批判を通して現在の東独の大学や学問のあり方や水準を推測させる上に大いなる興味がある。そして同時にこれはクラウゼの書物の成立した背後状況をも暗示させるものである。クラウゼは多数のゾムバルトの書物

を所かまわず引用し、またゾムバルト批判者の言葉も多数引用し、もって自己の解明の客観性の保証とみなしたようである。しかし彼はゾムバルトの思想と業績とを彼の精神的内面的努力の発展として跡づける努力を払わなかった。このエピソードははしなくもこのような努力が全然不可能な雰囲気の下で本書が作られたことを露呈しているものであるとおもわれる。

（池田浩太郎）